

後継者の企業家活動の生成と展開

Entrepreneurial Behavior Process in Family Businesses

落合 康裕^{*}
Yasuhiro Ochiai^{*}

Abstract

This paper reviews previous researches of family business succession from the perspective of the successor of entrepreneurial activity process. This paper reveals new issues in previous research of family business succession, and is to try to show the direction of the future research. Business succession has been regarded as the most important issue in previous studies regarding family businesses (Handler, 1990, 1994). Therefore, many studies of business succession field have been accumulated in family businesses study. The entrepreneurial orientation is important for family businesses, while the dynamism between the innovative behavior of the next generations and the succession process has been overlooked. This paper tries to integrate both family business succession researches and family entrepreneurship researches by entrepreneurial activity process concept (Hisrich & Peters, 1989; Wickham, 1998; Kanai et al., 2002). As a result, this paper reveals as follows, resource dependence from former management, successor's recognition of business opportunities, successor's re-definition of business domain, and the successor's acquisition and deployment of resources.

Keywords : Family Business, Successor, Succession, Entrepreneurship, Managerial Resource

1. 研究の目的

本研究は、ファミリービジネス⁽¹⁾の事業承継プロセスと後継者の企業家活動⁽²⁾との関係に焦点を合わせることによって、事業承継を通じた伝統と革新の問題を究明する分析枠組みを構築することを目的とする。着眼点は、後継者による親世代との事業承継プロセスを通じた企業家活動の生成と展開にある。具体的には、①後継者は先代経営者にどのように資源依存をするのか、②後継者は事業承継プロセスを通じてどのように経営環境における事業機会を認識するのか、③後継者はどのように既存事業を捉え自らが再定義するのか、そして、④後継者は事業承継プロセスを通じてどのように必要資源を獲得し動員するのかを、動的的に探索することである。ただし、これらの問いに対しては、本稿一本で答えることはできない。他方、本稿では先行研究レビューに基づいて、先述の問いに対する今後の実証研究に向けた分析枠組みを提示することはできる可能性があると考えている。

本稿の位置づけは、今後の新たな実証研究⁽³⁾における準備的研究である。以下、ファミリービジネ

^{*}日本経済大学経営学部経営学科

- (1) 「ファミリーが同一時期あるいは異なった時点において役員または株主のうち2名以上を占める企業」と定義する(後藤ほか、2012)。
- (2) 本稿における(後継者の)企業家活動とは、落合(2014b)、落合(2014c)、落合(2015)、落合(2016a)などで議論した能動的行動をさらに精緻化して定義している。具体的には、事業承継を通じた後継者による先代経営者への資源依存、事業機会の認識と評価、事業ドメインの再定義、資源の獲得と動員である。

スの事業承継プロセスと後継者の企業家活動にかかわる国内外の研究の体系的な整理を行ない、先行研究における含意と課題を明らかにしたうえで、今後の実証研究に向けた分析枠組みの提示と含意について議論を行なうことが本稿の目的である。

2. 先行研究における分化的発展の陥穽

従来、ファミリービジネスの事業承継を通じた次世代の能動的行動⁽⁴⁾の問題は、ファミリービジネスの事業承継研究とファミリー・アントレプレナーシップ研究という別々の研究領域で互いに没交渉のまま議論されてきた(落合, 2014; 2016)。前者のファミリービジネスの事業承継研究では、世代間の相互作用や役割調整について議論されてきたが(Handler, 1990)、この相互作用や役割調整が後継者の能動的行動の出現にどのような影響を与えているのか、またその後継者の能動的行動は結果として何を生み出すかという課題は、見落とされてきた。後者のファミリー・アントレプレナーシップ研究では、ファミリー志向性(伝統性、安定性、保守性)と企業家志向性(革新性、進取性、リスク選好性)の連関がファミリービジネスの継続的な価値創造をもたらすと指摘されてきた(Zellweger et al., 2012)。しかし、二つの志向性が世代間においてどのように共有・調整・融合されるかの議論について掘り下げられなかった。これは、ファミリービジネスの事業承継研究とファミリー・アントレプレナーシップ研究双方の先行研究における分化的発展に伴う陥穽であるといえるだろう。そのような中で、本稿では両研究を架橋する視点の提示を試みる。これは、ファミリービジネスの事業承継を通じた後継者の企業家活動の生成メカニズムの解明に向けての新たな分析視点である。この分析視点によって、既存のファミリービジネス研究のミッシングリンクを埋める可能性があると考えられる。以下、統合的な分析枠組みを提示する前に、両研究の系譜を振り返り、本稿の問題意識に対する知見と残された課題を確認しておくことにしよう。

3. ファミリービジネスの事業承継研究の系譜

事業承継とは、ファミリービジネスが直面する最も重要な問題であるとされてきた(Handler, 1994)。ファミリービジネスの事業承継研究は、先代経営者が果たす役割と課題から始まり、次世代に関心が拡大した後、両者ならびに利害関係者との関係性に焦点が移行してきた(後藤・嶋田, 2012)。

事業承継研究では、事業承継の現象を一過性の出来事ではなくプロセスもしくはその相互の関係性であるとしてきた(Churchill and Hatten, 1987; Handler, 1990; Longenecker and Schoen, 1978)。事業

(3) 本研究は、平成24年1月より創業100年以上のファミリービジネスに対して調査依頼が開始され、その後、福島県、東京都、神奈川県、静岡県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県に所在する計15社が調査対象として選定された。現在も調査は進行中であるが、本研究の進捗過程における成果は、順次、落合(2013)、落合(2014a)、落合(2014b)、落合(2014c)、落合(2014d)、落合(2015)、落合(2016a)、落合(2016b)として纏められ公表されている。

(4) 本稿では、企業家活動の発露としての行動を能動的行動と表記する。

承継プロセスにおける世代間の重なり合いを通じて (Churchill and Hatten, 1987)、ファミリービジネスの後継者は将来の経営者となる。故に、事業承継プロセスの中には、後継者の育成、先代経営者と後継者の経営上の協働、世代交代などの段階が含まれる (Churchill and Hatten, 1987)。後継者は、ファミリービジネスに入社後、非管理職の職務を経験した後、将来の経営者就任を見据えてあらゆる経営管理に関係する経験を積み経営者となる (Longenecker and Schoen, 1978)。そして、後継者は、親世代のもとで長期間の間、先代経営者による計画的な配置や昇進を通じて将来の経営者としての任務を遂行する (Longenecker and Schoen, 1978)。

また、後継者はファミリービジネスの文化に応じた思考や行動の様式を受け入れると共に従業員からの支持の獲得を経て、ファミリービジネスに価値を取込む能力と意志を育む信頼の獲得に至る。そして、ファミリービジネスに貢献することを通じて自信をつけながら、後継者としての地位を周囲に認めさせる正統性の獲得に至るとされる (Barach et al., 1988)。

このように、事業承継プロセスについては、世代間の重なり合いの視点から (Churchill and Hatten, 1987)、先代経営者と後継者の相互の役割を概念化することができるとされた (Handler, 1994)。つまり、後継者は自分の能力を先代経営者に示して次の段階の役割に移行し、先代経営者は後継者から示された能力を評価して後継者に権限の委譲を行なう (Handler, 1994)。後継者が能力を蓄積しているにもかかわらず、先代経営者が後継者に新たな役割を担わせない、反対に、後継者の能力が未熟であるにもかかわらず、先代経営者が後継者に経営上の役割を担わせる場合には、役割調整上の問題が生じることになる。Handler 研究によると、事業承継プロセスには先代経営者が後継者の能力蓄積に応じて権限を委譲するという後継者への自律的な仕事環境の提供が内在されていることがうかがえる。後継者への自律性の確保については、事業承継プロセスにおいて後継者自身の能動的行動を促す源泉となるものである。

しかし、過去のファミリービジネスの事業承継プロセス研究の論点の中心は、事業承継の発展段階や影響力の移行段階など事業承継プロセスそのものを主眼とするものが殆どであった。上述の通り、経営者世代間の重なり合い (Churchill and Hatten, 1987) が存在するファミリービジネスの事業承継プロセスにおいて、後継者は先代世代の影響を受ける。それだけではない。後継者は、親世代の影響下において独自性を発揮しにくく (Gersick et al., 1997)、事業承継プロセス初期では周囲から受容されていないことから (Handler, 1994)、制約的な状況におかれている (落合, 2014bc ; 2015 ; 2016a)。このように、自律的かつ制約的な状況が混在する事業承継プロセスにおいて、先行研究では後継者がどのように能動的な行動に至るのかというプロセスは明らかにされていない。後継者による企業家活動の発露としての能動的行動の生成と展開という問題は、事業承継との関係において十分に議論されることなく、事業承継プロセスと切り離された形で、ファミリー・アントレプレナーシップ研究で議論されてきた。事業承継プロセスと後継者の行動という分析視点が別々に研究された結果、後継者が事業承継を通じてどのようなダイナミック行動を生み出すのかという論点は見落とされてきたといえるであろう。

4. ファミリー・アントレプレナーシップ研究の系譜

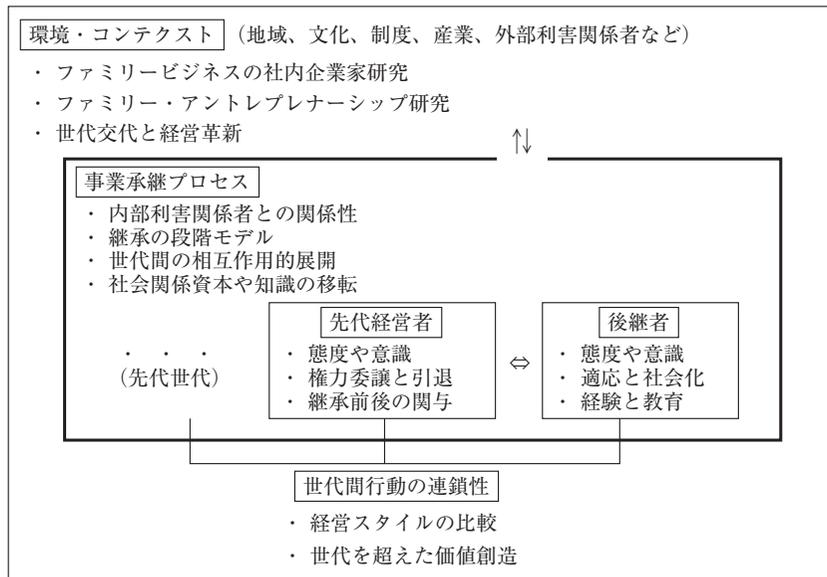
次に、ファミリー・アントレプレナーシップ研究の系譜を辿ることにしよう。ファミリー・アントレプレナーシップ研究の黎明期では、ファミリービジネスにおいていかに社内企業家を育てていくのかという論点が議論された。ファミリービジネスの先代経営者が次世代の企業家たる後継者を育てることは、ファミリービジネスの存続、収益性、成長にとり重要なものである (Poza, 1988; Salvato, 2004; Kellermanns and Eddleston, 2006)。Poza (1988) は、創業経営者はファミリービジネス内において社内企業家を育て支援していくべきであるとしている。Poza (1988) の研究の貢献は、従来のファミリービジネス研究において創業経営者のパーソナリティにかかわる側面が強調されてきた中、創業経営者が二代目以降の企業家活動を支援する必要性を訴えた点が大いである。具体的には、二代目以降の経営者によるリスクテイキングを伴う能動的行動の必要性と、それを保護・支援する前経営者世代の役割を提示したことにある。

その後、ファミリービジネスの経営行動の特徴にかかわる議論が展開される。ファミリービジネスとは、伝統性、安定性、保守性などのファミリー志向性をもつと同時に、革新性、進取性、リスク選好性などの企業家志向性という特徴を合わせ持つというものである。Kellermanns and Eddleston (2006) によると、ファミリービジネスの企業家的革新の源泉となる企業家志向性は、世代間による関わり合い、変革への意思、技術的機会を認識する能力から構成されると指摘している。世代間による関わり合いは、先代経営者から後継者への継承プロセスにおける相互作用的展開を含み、変革への意思や機会認識は、従来の企業家研究においても企業家活動が生成される要素として議論されてきたものである。その後、ファミリービジネスの経営者在任期間の長期化がもたらす経営者行動の保守化傾向と世代交代による経営の活性化について議論がなされることになる。Zahra (2005) は、経営者の企業への帰属意識は企業家志向性を促進するが、経営者の在任期間の長期化が経営者の行動を保守化させてしまうことを指摘している。Zahra (2005) の研究の貢献は、ファミリービジネスの経営者の在任期間が長くなるにつれてリスク回避的になる傾向になるが故に、事業承継を通じた次世代経営者による企業家的革新の必要性を示したことである。

その後、先述の社内企業家研究の発展的議論として、世代を超えた企業家活動という概念が示されている (Zellweger et al., 2012)。Zellweger et al. (2012) は、ファミリービジネスにおける世代間の企業家精神や価値創造の連鎖性にかんする研究を行なっている。Zellweger et al. (2012) は、先述のファミリービジネスにおける企業家志向性とファミリー志向性の相互作用の重要性を指摘し、この相互作用がファミリービジネスの経営成果に影響を与え世代を超えた価値創造に繋がり企業の長寿性に繋がる可能性を示唆している。Zellweger et al. (2012) の貢献は、ファミリービジネスが当代の経営者のためではなく次世代の為に事業活動における変化や成長を育もうとする側面を指摘したことである。Zellweger et al. (2012) の研究が、経営者としての当主よりも事業の永続が重視されてきた日本の事業承継研究と符合する部分が多いことは興味深い。

このようにファミリー・アントレプレナーシップ研究においては、大きく分けて企業家的革新を担う人材をファミリービジネスの中でいかに育てていくのかという社内企業家育成の議論と、世代を超

えた企業家活動と価値創造という二つの議論がなされてきた。これらの先行研究は、後継者による企業家活動のプロセスについて解明しようとしている点において本稿の着眼点と符合する。しかし、ファミリービジネスにおける世代間の相互作用、並びに世代間の相互作用を通じて後継者による企業家活動の生成や展開については、十分な議論がなされてこなかったといえるだろう。



(出所) 落合 (2016a) の図2-2 (p.9) を一部加筆の上引用。

図1 ファミリービジネスの事業承継研究の体系化

5. 企業家活動プロセスの視点

先行研究では先代世代が関与する事業承継プロセスと、後継者による能動的行動の生成と展開のプロセスにかかわる論点は見落とされてきた。本節では、この二つの論点の結節点として、従来の企業家研究⁽⁵⁾において議論されてきた企業家活動プロセスという視点について検討してみることにしよう。

企業家研究の領域における企業家活動のプロセスは、どのような議論がなされてきたのだろうか。Hisrich & Peters (1989) は、その要件として「機会の認識と評価」「事業計画の策定」「必要資源」「事業管理」を提示している。また、Wickham (1998) によると、「起業家」「起業家機会」「資源」「組織」の四つの要件を提示し、その要件間の相互作用であるとして企業家活動プロセスを整理している。Hisrich & Peters (1989) や Wickham (1998) の貢献は、ベンチャー企業家⁽⁶⁾が事業を立ち上げ事業を軌道に乗せるために必要な具体的な要件を示したことである。具体的な要件が提示されることで、企業家活動の生成と展開にかかわる論点が明確になり、追加的な議論が巻き起こりやすくなる。

(5) ベンチャー企業家（起業家）にかかわる研究を示す。

(6) 本稿では、ファミリービジネスの後継者との区別を明確にするため、事業をゼロから立ち上げた企業家のことをベンチャー企業家と表記する。

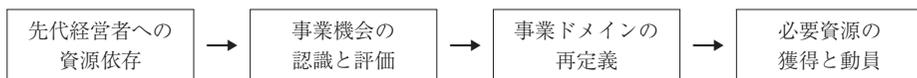
その後の金井ほか（2002）によると、企業家活動プロセスとは既存の調和状態を新結合により創造的に破壊するプロセスを含むとともに、他方で新結合により生み出された逸脱状態から新たな調和状態へ向かうものであると指摘する。金井ほか（2002）は、企業家活動の一連の循環と進化のプロセスを示しているといえるだろう。企業家活動プロセスが提示されることで、企業家活動の生成と展開についての時間的変化や利害関係者の相互作用について観察できる分析枠組みが提供されることに繋がる。

先述の通り、ファミリービジネスの事業承継プロセスの研究では、事業承継における世代間の関係性や相互作用的展開が後継者の企業家活動のプロセスにおいてどのように影響するのかという議論はなされてこなかった。その意味では、事業承継プロセスにおいて、Hisrich & Peters（1989）、Wickham（1998）並びに金井ほか（2002）が提示する企業家活動の要件とプロセスの概念を援用することで、世代間の相互作用と後継者の能動的行動の連関を新たな視点から示すことができる可能性がある。

6. ファミリービジネス後継者の企業家活動プロセス

一般的に、企業家研究では、経営資源が乏しいベンチャー企業家が制約的な経営環境の中で、いかに経営資源を獲得し動員して企業を立ち上げ軌道に乗せていくのかを追求する研究である。他方、ファミリービジネスの後継者は、一般的に先代世代の保有する経営資源を引き継ぐことが予定されている存在である。その意味では、企業家研究で示されたモデルをそのままファミリービジネスの事業承継に適用することは適切ではない。後継者はファミリービジネスに入社当初、無条件に経営資源を動員できる状態ではなく、むしろ先代世代に経営資源を依存していることが先行研究で明らかにされている（落合、2014bc；2015；2016a）。ベンチャー企業家が最初に事業機会の認識を行うのに対して、後継者は自分のファミリービジネスが保有する資源を意識するものと考えられる。そこで、本稿では従来の企業家研究に依拠しつつ、新たに「ファミリービジネス後継者の企業家活動プロセス」を提示する。この分析枠組みは、「先代経営者への資源依存」「事業機会の認識と評価」、「事業ドメインの再定義」、「資源の獲得と動員」の四つの要件から構成されるプロセスと定義する。その上で、以下、事業承継プロセスについて後継者の企業家活動プロセスの視点から分析し、今後のファミリービジネスの事業承継研究の新たな論点を考察することにしよう。

図2 ファミリービジネス後継者の企業家活動プロセス
(Family Entrepreneurial Process in Business Succession)



(出所) Hisrich & Peters（1989）、Wickham（1998）並びに金井ほか（2002）を参考に、筆者作成。

7. 議 論

本節では、ファミリービジネスの事業承継を通じた後継者の企業家活動の生成と展開について、上述の四つの要件とプロセスに基づいて考察を図ることとしたい。

(1) 先代経営者への経営資源の依存

事業をゼロから立ち上げるベンチャー企業家は、活動上限られた経営資源しか保有しない（金井ほか、2002）。他方、ファミリービジネスの後継者は、先代世代までに蓄積された経営資源を活用することができると考えられる。ファミリービジネスの特有の経営資源は、ファミリー性と呼ばれている（Zellweger et al, 2012）。先行研究では、ファミリー性の機能や効果について具体的に明らかにされていない。そのため、後継者が親世代からどのような経営資源をどのように依存しているのかについての議論は十分になされてこなかった。

「先代経営者への資源依存」という分析視点は、社内からの依存と社外からの依存の二つに分けて考えることができる（落合、2016b）。第一の社内からの資源依存の視点とは、ファミリービジネスの後継者が先代世代から従業員や技術者、設備、資金、技術等を依存している状況を分析することができる。落合（2014bc；2015；2016a）によると、ファミリービジネスの後継者は、無条件にこのような経営資源を利用可能ではなかった。先代経営者の世代との関係を維持しようとするあまりに、後継者が独創的な行動を抑制しようとすることも想定される。「先代経営者への資源依存」の視点からは、後継者が先代経営者から経営資源を依存する行動が、結果的に後継者の行動の自律を高めるのか、もしくは行動の制約を高めるのかなどの示唆を得られる可能性がある。

それだけではない。ファミリービジネスの後継者は、社内だけではなく、社外の利害関係者からも経営資源を依存することがある（落合、2016b）。例えば、先代経営者の世代から取引のある顧客、仕入先、業界団体、地域社会などの外部の利害関係者との関係（社会関係資本）である。先代経営者世代の恩恵があるからこそ、後継者は外部の利害関係者から受入れられると考えられる。他方、社内の場合と同様、先代世代との繋がりが強い外部の利害関係者との関係性は、後継者の自律性の余地を狭めてしまう可能性もある。このように、「先代経営者への資源依存」関係を分析することで、後継者が直面する制約や企業家活動が生成する基礎的な仕事環境の条件を明らかにできると考えられる。

(2) 後継者による事業機会の認識と評価

ベンチャー企業家による事業機会の認識は、現状からの逸脱の契機になるという（金井ほか、2002）。その意味では、企業家による事業機会の認識とは、企業家活動全体の発露として位置づけられる。後継者による「事業機会の認識と評価」という分析視点は、ファミリービジネスの後継者が経営環境から事業機会をどのように見出しているのかという点を明らかにしてくれる可能性がある。ベンチャー企業家の場合と異なり、ファミリービジネスの後継者の場合は、先代世代との関わりや制約が存在するなかで（Churchill and Hatten, 1987；Handler, 1990；Longenecker and Schoen, 1978）、事業機会の認識と評価をせねばならない。ベンチャー企業家と比較すると、ファミリービジネスの後継者がおかれる仕事環境は制約的であるといえるだろう。その意味では、後継者は先代世代からの伝統の継承が求められる制約の中で、どのように企業家活動を生み出しているのかという、知見を提供してくれる可能性がある。

それだけではない。ファミリービジネスの事業承継プロセスにおける先代経営者の関与の仕方についても、知見を与えてくれる可能性がある。先代経営者は、いかに事業承継プロセスにおいて後継者

に自律的な状況を確保して、後継者に事業機会の認識を促していくのかという点である。この分析視点からは、事業承継プロセスにおける後継者の能動的行動を促す先代経営者の行動について考察する視点を得ることができるだろう。

(3) 後継者による事業ドメインの再定義

ベンチャー企業家の事業ドメインの設定は、事業コンセプトや事業計画に関係するものであり、事業システムの変更にも繋がるものである（金井ほか、2002）。それでは、先代世代の商慣習やしきたりの継承が求められるファミリービジネスの後継者は、どのようにして独自の事業ドメインを設定するのであろうか。後継者による「事業ドメインの再定義」という分析視点からは、後継者が既存の事業ドメインに対してどのように向き合い、企業家的革新のいわば設計図ともなる独自の事業ドメインをいかに設定しているのかについての示唆を得られる可能性がある。欧米の先行研究では、後継者による伝統に則した保守的行動（ファミリー志向性）と、経営環境に応じた進取的行動（企業家志向性）との対極的な意味合いでの議論が多かった。他方、日本の長寿型ファミリービジネスを対象とした研究によると、後継者は既存事業について再解釈している態様が示されている（加藤、2014）。また、ファミリービジネスの後継者の能動的行動は、多くが長年築き上げてきた既存の事業ドメインを参照する形で生成されていることも示されている（落合、2014c；2015；2016a）。後継者による「事業ドメインの再定義」という分析視点からは、世代交代を通じた後継者による企業家的革新の問題に対して、より豊富な示唆を与えてくれる可能性がある。さらに、ファミリービジネスの各世代による事業ドメイン変更や再定義の履歴を探索的に分析することによって、ファミリービジネスの発展・成長の動的なプロセスを理解することができるかもしれない。

(4) 後継者による経営資源の獲得と動員

ファミリービジネスの後継者は、先代経営者に経営資源を依存しているだけではない。先行研究では、後継者が独自で経営資源を獲得していることが示されている（落合、2014c；2015；2016a）。後継者による「資源の獲得と動員」の分析視点は、後継者が独自の事業ドメインに基づいて能動的行動を行う態様についての多様な分析視点を提供してくれる可能性がある。

第一の分析視点が、後継者は先代経営者から経営資源を依存する以外に、どこから必要な経営資源を獲得するのかというものである。この分析視点は、さらに社外と社内に分けることができる。社内については、後継者自身が選抜採用した人材等である。社外については、後継者が独自に開拓した顧客や仕入先との関係資源のことである。

第二の分析視点が、後継者によって獲得された経営資源であっても資源の源泉が先代経営者の恩恵に由来するものなのか、もしくは後継者によって調達されたものかというものである。動員される経営資源の出所によっては、後継者のおかれる環境やそこから生み出される能動的行動に影響を与える可能性が考えられる。

第三の分析視点が、後継者によってどのように経営資源が展開されていくのかというものである。どのように後継者が先代経営者からの自立を図りながら経営資源の展開を行うのか、資源展開を行う

上で社内や社外の利害関係者との関係のバランスをどのようにとっていくのかについての知見を与えてくれる可能性がある。

(5) ファミリービジネス後継者の企業家活動プロセスの循環と進化

後継者の企業家活動プロセスにおける四つの要件は、各々が独立して存在するものではない。ベンチャー企業家の先行研究と同様に、四つの要件が連動して一つのプロセスを形成すると考えられる。他方、筆者のこれまでの事例研究から推察されることは、ファミリービジネス後継者の企業家活動プロセスは循環する可能性があることである（落合、2014c；2015；2016a）。それだけではない。その循環プロセスは、一部進化する可能性も示唆されている。具体的には、事業承継プロセスの初期の段階では、後継者の先代経営者への資源依存の割合が高い。しかし、事業承継プロセスの中期にかけて、後継者による先代世代への資源依存の度合いが低減していく。後継者が独自に必要な資源を獲得して、後継者の動員可能な資源を増加させている可能性が示唆されているのである。つまり、プロセスの循環の進化とは、事業承継プロセスが進展してくことに伴い、第一段階である先代経営者への資源依存が弱まり、事業承継プロセスの中期から終盤にかけては、第一段階の要件を介さない形でプロセスが循環することが考えられる。今後の実証研究の蓄積によって、後継者の企業家活動プロセスの循環と進化の態様を明らかできれば、複雑なファミリービジネスの事業承継という現象について動的に明らかにできる可能性がある。

8. 結 語

本研究の成果としては、三つである。第一に、ファミリービジネスの事業承継プロセスと後継者の行動を動的に分析するうえで、先行研究に依拠しつつ事業承継プロセスを通じた企業家活動プロセスという独自の分析枠組みを提示したことである。これによって、ファミリービジネスの事業承継プロセスを動的に説明できる枠組みが提供できる可能性がある。特に、事業承継プロセス初期の後継者の企業家活動の生成だけでなく、事業承継プロセス中期以降の後継者の企業家活動の展開について探索する定礎を提示した。

第二に、今後のファミリービジネスの事業承継研究並びにファミリー・アントレプレナーシップ研究における新たな論点を提示したことである。ファミリービジネスの事業承継における企業家活動プロセスという概念が、ファミリービジネスの事業承継研究並びにファミリー・アントレプレナーシップ研究の結節点となる可能性がある。その意味で、本稿は従来のファミリービジネス研究のミッシングリンクを埋める研究となっていることである。

第三に、複雑なファミリービジネスの勘所ともいえるべき事業承継の問題についての分析枠組みが示されたことで、今後の研究上の指針を提供したことである。

他方、残された課題も存在する。当該分析枠組みは、あくまで先行研究に依拠して構築したモデルである。ファミリービジネスという複雑な現象を説明するには、更なる実証研究の蓄積によってモデルのブラッシュアップが必要であると考えている。

参考文献

- Barach, J. A., Gantisky, J., Carson, J. A., and Doochin, B. A. (1988) "ENTRY OF THE NEXT GENERATION- STRATEGIC CHALLENGE FOR FAMILY BUSINESS," *Journal Of Small Business Management*, 26(2), pp.49-56.
- Churchill, N. C., and Hatten, K. J. (1987) "Non-Market-Based Transfers of Wealth and Power - A Research Framework for Family Businesses," *American Journal Of Small Business*, 11(3), pp.51-64.
- Gersick, K. E., Davis, J. A., Hampton, M. M., and Lansberg, I. S. (1997) *Generation to Generation : Life Cycles of the Family Business*, Harvard Business School Press (犬飼みずほ・岡田康司訳、『オーナー経営の存続と継承』流通科学大学出版、1999年).
- 後藤俊夫・嶋田美奈 (2012) 『ファミリービジネス-知られざる実力と可能性-』白桃書房.
- 後藤俊夫・落合康裕編 (2015) 『ファミリービジネス白書 2015 年度版 : 100 年経営をめざして』同友館.
- Handler, W. C. (1990) "Succession in Family Firms : A Mutual Role Adjustment between Entrepreneur and Next-generation Family Members," *Entrepreneurship : Theory & Practice*, 15(1), pp.37-51.
- Handler, W. C. (1994) "Succession in Family Business : A Review of the Research," *Family Business Review*, 7(2), pp.133-157.
- Hisrich, R. D. and Peters, M. P. (1989) *Entrepreneurship : Starting, Developing and Managing a New Enterprise*, Irwin Professional Publishing.
- 加護野忠男 (2008) 「学術からの発信経営学とファミリービジネス研究」『学術の動向』第 13 巻第 1 号、pp.68-70 頁.
- 金井一頼・角田隆太郎編 (2002) 『ベンチャー企業経営論』有斐閣.
- 加藤敬太 (2014) 「ファミリービジネスにおける企業家活動のダイナミズム : ミツカングループにおける 7 代目当主と 8 代目当主の企業家継承と戦略創造」『組織科学』第 47 巻第 3 号、29-39 頁.
- Kellermanns, F. and Eddleston, K. (2006) "Corporate Entrepreneurship in Family Firms : A Family Perspective," *Entrepreneurship : Theory & Practice*, 30(6), pp.809-830.
- 忽那憲治・山田幸三編 (2016) 『地域創生イノベーション : 企業家精神で地域の活性化に挑む』中央経済社.
- Longenecker, J. G., and Schoen, J. E. (1978) "MANAGEMENT SUCCESSION IN THE FAMILY BUSINESS," *Journal of Small Business Management*, 16(3), pp.1-6.
- Miller, D. (1983) "The Correlates of Entrepreneurship in Three Types of Firms," *Management Science*, Vol.29, pp.770-791.
- 奥村昭博・加護野忠男編 (2016) 『日本のファミリービジネス : その永続性を探る』中央経済社.
- 落合康裕 (2013) 「事業承継を通じた伝統と革新」『Global 産業と創造経営』、291-303 頁.
- 落合康裕 (2014a) 「事業継承における経営者の役割」『六甲台論集』第 60 巻 3・4 号、1-16 頁.
- 落合康裕 (2014b) 「ファミリービジネスの事業継承と継承者の能動的行動」『組織科学』第 47 巻第 3 号、40-51 頁.
- 落合康裕 (2014c) 『ファミリービジネスの事業継承研究-長寿企業の事業継承と継承者の行動-』神戸大学大学院経営学研究科博士論文.
- 落合康裕 (2014d) 「ファミリービジネスの事業継承研究の系譜」『事業承継』Vol. 3、55-66 頁.
- 落合康裕 (2015) 「老舗企業における事業承継と世代間行動の連鎖性-福島・大和川酒造店における事例研究-」『事業承継』Vol. 4、64-79 頁.
- 落合康裕 (2016a) 『事業承継のジレンマ : 後継者の制約と自律のマネジメント』白桃書房.
- 落合康裕 (2016b) 「中小企業の事業承継と企業変革 : 老舗企業の承継事例から学ぶ」中部産業連盟機関誌『プロGRESS 2016 年 11 月号』、pp.9-14.
- Ochiai, Y. (2016) "Business Succession and Successor Legitimacy in Well-Established Family Companies in Japan", *International Journal of Business and Information*, 11(3), 316-340.
- 大滝精一・金井一頼・山田英夫・岩田智 (1997) 『経営戦略』有斐閣.
- Poza, E. J. (1988) "Managerial Practices That Support Interpreneurship and Continued Growth," *Family Business Review*, 1(4), pp.339-359.
- Rogoff, E. G. & Heck, R. K. Z. (2003). Evolving research in entrepreneurship and family business : Recognizing family as the oxygen that feeds the fire of entrepreneurship (Introductory editorial note for special issue). *Journal of Business Venturing*, 18(5), 559-566.
- Salvato, C. (2004). Predictors of entrepreneurship in family firms. *Journal of Private Equity*, 7(3), 68-76.
- Wickham, P. A. (1998) *Strategic Entrepreneurship*, Pitman Pub.
- Zahra, S. A. (2005). Entrepreneurial Risk Taking in Family Firms. *Family Business Review*, 18(1), 23-40.
- Zellweger, T. M., Nason, R. S., and Nordqvist, M. (2012) "From Longevity of Firms to Transgenerational Entrepreneurship of Families : Introducing Family Entrepreneurial Orientation," *Family Business Review*, 25(2), pp.136-155.